

ミステリ読書案内

2023. 6. 17 発行元

第488号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

大崎梢「27000冊ガーデン」

4月に双葉社から大崎梢の図書館ミステリ『27000冊ガーデン』が出た。本好き人間にとって本に纏わる話題はどれでも嬉しいものだ。神奈川県にある戸代原高校の図書館での司書・星川駒子さんの物語。

27000冊の蔵書

高校の図書館にある蔵書の平均冊数が27000冊だという。私が勤めていた中学校では10000冊に満たないところが多かった。なので27000冊という数字は私の感覚からするとかなり大きな数字。本が活用されているかという点では疑問が残るが。

私はかつて図書室を利用する方の教員だったので、学校図書館の現状はよく理解している方だと思う。図書室の理科関係の本を大量に理科室に運搬して、授業の中で調べ学習をすることもあったので…。

大崎梢と「本」の関わり

大崎梢は元書店員というだけあって「本」関りの作品が多い。今回は高校の図書館。どちらかと言うと、読書・本の利用というよりは自学自習の場所として活用されているようだ。本書の中のエピソードとしても出てくるが、進学校の一部の教員

の中には「読書」に夢中になり過ぎないようにブレーキをかける例もあるそうだ。「読書」ぐらい好きなようにさせればよいと思うが…。

冒頭から本の名前が登場してくるのが嬉しい。伊吹有喜『犬がいた季節』、青山美智子『お探し物は図書室まで』、宮部みゆき『心とろかすような』、マンディーノ『十二番目の天使』…。

司書・駒子さんへの相談は…

第一話『放課後リーディング』は、二年生の男子生徒・今井聡史からの相談事。聞くと、昨日殺人現場に隣接した場所で本を読んでいたと言う。争い事が起きた時に密かに現場を離れたのだが、どうやらそこに図書館から借りた本を落としてきたという話。本はその後別ルートで駒子の元に届くのだが…。

生徒の不安を取り除くとともに、本の経路をたどって事件の謎解きに挑む駒子。一緒に考え、ヒントを出してくれるのは出入りの書店員

「図書館ミステリ」

米澤穂信の『本と鍵の季節』『葉と嘘の季節』は図書館ミステリである。森谷明子の『れんげ野原のまんなかで』『花野に眠る』も図書館ミステリ。今回取り上げた大崎梢にも図書館関連のミステリがある。『本パスめぐりん。』『めぐりんと私』。本に囲まれた環境を羨ましく思うのは限られた人なのか…。

である「ユーカリ書店」の針谷敬斗。目が釣りがっているので一見冷たく見えるのだが、根はとても親切。第一話以降も協力関係が続く。

第四話の『クリスティにあらず』は校内で起きた生徒の持ち物紛失事件に関わるもの。物はまもなく発見されるのだが、傍に図書館の本が置いてあるのが特徴。それが連続して四件も…。本の題名を並べてみると…。クリスティの『ABC殺人事件』が話題に上がる。

中・高生が本を読める余裕を

今の中学生、高校生は忙しすぎ。常に勉強や部活や行事、進学塾などに追いまわられて本を読んでいる余裕なんてほとんどない。少しでもゆっくりできると良いのだが。そして本を読んでほしいものだ。

名取佐和子「図書室のはこぶね」

昨年3月に実業之日本社から出た本。表題に『図書館・図書室』という言葉が入るとどここの図書館でもその本を購入するようだ。司書の方の目に留まりやすいのだろうか。あたかも「図書館で働いている人は図書館の本を買う」という決まりが存在するかのようだ。これから本を出版する人は題名に「図書館」を入れるとある程度は売れるということ…かな。

名取佐和子という作家はミステリ専門の作家ではなく、本書も「謎」が提示されているので「ミステリ」分類にしたものの、基本は「学園もの」「青春小説」という捕らえ方でいいと思う。サスペンス性はそれほど強くなく、特に前半部分は高校生同志の人間関係がゆったりゆったり進む流れである。

野亜高校は体育祭直前。全校生徒は呼び物の「土曜のダンス＝土ダン」の練習に夢中になっている。バレー部所属の百瀬花音は脚の怪我で運動を止められ、しかたなしに図書委員の仕事を代わりに引き受けることになった。図書室に行ってみるとそこにいたのは図書委員の俵朔太郎と司書の伊吹さん。机の拭き掃除をしていると文庫本が一冊落ちた。ケストナーの『飛ぶ教室』。蔵書データを調べるとその本は10年前に行方不明になった本だった。本のページの間にはメモがあって「方舟はいらない 大きな腕白ども 土ダンをぶつぶせ！」と書いてあった。花音は本がどこから現れたのか、言葉の裏に隠された意味は何なのかの「謎」に興味を魅かれてしまう。校舎に「土ダン」の練習の音が響く中、花音と朔太郎の10年前に遡る旅が始まる。